論文の要旨

ウムングンゲレル

本稿は筆者による1999年と2000年の２回の現地調査を通じてまとめたデータの基礎資料に基づくものである。

１次的資料を収集・整理・分析することによって、モンゴル語ナイマン方言の発展の法則性と傾向をできるだけ客観的に解明を目的とした。

本稿を執筆にあたって用いた研究方法としては記述研究を中心とし、社会言語学的研究方法も用いた。モンゴル語のナイマン方言をモンゴル文語及び標準音と比較研究を中心にし、できる限りホルチン方言、バーリン方言、ハラチン方言など隣接方言とも比較して検討の範囲を広げた。そして、従来の方言区画論において、ナイマン方言をバーリン方言の一部、或はホルチン方言の一部としていた通説を再検討した結果、ナイマン方言はバーリン方言の一部、或はホルチン方言の一部ではなく、ナイマン方言はバーリン方言、ホルチン方言と同じく内モンゴルの諸方言の一つであるということを実証できた。

ナイマン方言はホルチン方言、バーリン方言の中間的方言であり、また隣接のホルチン方言、バーリン方言、ハラチン方言と異なり、チャハル方言と共通する特徴ももっている。ナイマン方言は、標準音及び隣接の諸方言との近似性が高いが、チャハル方言との近似性（隣接方言と異る）もみられる。一方、ナイマン方言固有の特徴もみられる。

ナイマン方言とチャハル方言の近似性の近さは、現在の地理的距離の遠近を表すのではなく、歴史的な由来に起因すると考えられる。ナイマン方言は標準音の方言と近い方言であるが、音韻・形態・語彙の面でそれぞれ独自の特徴もみられる。

また、漢語の影響が強いことも実証できた。

語彙の調査資料を分析した結果、ナイマン方言における隣接諸方言と共通する方言語彙の中では、共通性がともっとも高い方言がオンニォード方言ということが実証できた。

音韻の世代差による研究で、ナイマン方言のホルチン方言化の進行を実証できた。

今後の課題として、ナイマン方言とオンニォド方言との音韻・形態・語彙の面の比較研究を進めたい。また、ナイマン方言誌を作ることも今後の課題である。

ナイマン方言は、隣接諸方言の中でもとくに川を挟んだオンニォード方言ともっとも近似性が高い。川をはさんだ２つの方言が、陸続きで隣接するその他

の方言よりも近似性が高いという現象については、今後歴史的な経緯を含めて考察する必要がある。モンゴル語のGol「川」には「中心」という意味もあり、家畜や牧民が水を求めて集まる中心でもあったモンゴル高原の川を中心とする地域は、単に陸続きであるだけの他の行政単位（旗）よりも関係が深いという指摘もできよう[1]。モンゴル高原は日本と異なり川が少なく，方言境界と川との関係については今後よく検討する必要がある。

本稿では、ナイマン方言の音韻と形態について中心に研究し、語彙の主要特徴について簡単に紹介したが、今後は方言同士の比較研究をより一層進めていきたい。